上野殿御返事

弘安二年一一月六日　五八歳

唐土に竜門と申すたき(滝)あり。たか(高)き事十丈、水の下ることがっぴゃう(強兵矢射落)がやをいをとすよりもはや(早)し。このたきにをゝく(多)のふなあつまり(鮒集)てのぼらむ(登)と申す。ふなと申すいを(魚)ののぼりぬれば、りう(竜)となり候。百に一つ、千に一つ、万に一つ、十年廿年に一つものぼる事なし。或ははやきせ(急瀬)にかへり、或いははし・たか・とび・ふくろう(鷲鷹鴟梟)にくらわれ、或は十丁のたきの左右に漁人(いおとるもの)どもつらなり(列)ゐて、或はあみ(網)をかけ、或はくみとり、或はいて(汲射)とるものもあり。いをのりう(魚竜)となる事かくのごとし。

日本国の武士の中に源平二家と申して、王の門守(かどまも)りの犬二疋(ひき)候。二家ともに王を守りたてまつる事、やまがつ(山人)が八月十五夜のみねより(峰出)いづる(愛)をあいするがごとし。てんじゃう(殿上)のなんにょ(男女)のあそぶをみては、月と星とのひかり(光合)をあわせたる(猿)を、木の上にてさるのあいする(愛)がごとし。かゝる身にてはあれども、いかんがして我等てんじゃう(殿上)のまじわり(交)をなさんとねがいし程に、平氏の中に貞盛(さだもり)と申せし者、将門(まさかど)を打ちてありしかども、昇でんをゆるされ(殿許)ず、其の子正盛(まさもり)又かなわず。其の子忠盛(ただもり)が時、始めて昇でんをゆるさる。其の後清盛(きよもり)・重盛(しげもり)等、てんじゃう(殿上)にあそぶのみならず、月をうみ、日をいだくみとなり(抱身)にき。仏になるみち(道)、これにをとる(劣)べからず。いをの竜門をのぼり、地下(じげ)の者のてんじゃう(殿上)へまいる(参)がごとし。

身子(しんし)と申せし人は、仏にならむとて六十劫が間菩薩の行をみて(満)しかども、こら(堪)へかねて二乗の道に入りにき。大通結縁(だいつうけちえん)の者は三千塵点劫(じんでんごう)、久遠下種(くおんげしゅ)の人の五百塵点劫生死にしづ(沈)みし、此等は法華経を行ぜし程に、第六天の魔王、国主等の身に入りて、とかうわづらわせしかばたいしてすてしゆへに、そこばく(若干)の劫に六道にはめぐり(巡)しぞかし。

かれ(彼)は人の上とこそみしかども、今は我等がみ(身)にかゝれり。願はくは我が弟子等、大願ををこせ。去年去々年(こぞおととし)のやくびゃう(疫病)に死にし人々のかずにも入らず、又当時蒙古(もうこ)のせめ(攻)にまぬかるべしともみへず。とにかくに死は一定なり。其の時のなげきはたうじ(当時)のごとし。をなじくはかり(仮)にも法華経のゆへに命をすてよ。つゆ(露)を大海にあつらへ、ちり(塵)を大地にうづむ(埋)とをもへ。法華経の第三に云はく「願はくは此の功徳を以て普(あまね)く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」云云。恐々謹言

十一月六日　日　蓮花押

上野賢人殿御返事

此はあつわら(熱原)の事のありがたさに申す御返事なり。